



じかっ



自立活動だより NO. 4

令和3年5月7日（金）文責：佐方



抽出指導を始めるに当たって（その1）

いよいよ5月6日（木）から抽出指導が始まります。（始めました。）

子どもが抱える困難はそれぞれで、私のできることは不十分な面が多々あるのですが、以下のように進めていこうと基本的な考え方をお伝えしておきます。

とはいっても私の考えではなく、言語聴覚士の中川信子さんの「発達障害をもつ子どものことばを育むー外来でのご家族へのアドバイスを含めてー」（小児の精神と神経 第57巻第3号別冊）を引用して紹介します。

今後、指導記録も含めて連携を図りますので、担任の先生方の御意見や御要望もお聞かせください。

◇ ことばを育てるかわり

1 からだ遊びが大切

1) ことばの前に遊びを通してコミュニケーション

「ことばが遅い」という主訴の幼児と言語聴覚士との関わりは多様である。4歳5歳以上で、一定時間注意の持続が可能で着席できるお子さんでは、カードなどを使い限定された机上課題を通して言語能力の促進を図るよう計画することができる。

しかし、1歳2歳では着席課題は難しいことが多い。3歳4歳以上であっても、発達障害の可能性があり、注意持続が保てないお子さんに対しては、まず、からだを使った楽しい遊びに徹底的につき合うことから始める。遊びを通して、コミュニケーションスキルを育て、話し手に注目し、ことばかけや指示を聞き取る力を育てるためである。



3年前のKさん

保護者から「ことばが遅いから来たのに、なぜ体を使う遊びをするんですか？」といぶかしげに質問されることもあるが、ことばの発達にかかわる脳の働きを説明し「大脳のことばの場所にちゃんと刺激が届くためには、聞こえたことばの通り道である脳幹と大脳辺縁系の場所の電線が電気を通しやすくなっている必要があるからです。体を動かす遊びが電線の通りをよくするためには一番効果的なのですよ」と伝えて納得していただく。

続く



じかっ



自立活動だより NO. 5

令和3年5月7日（金）文責：佐方



抽出指導を始めるに当たって（その2）

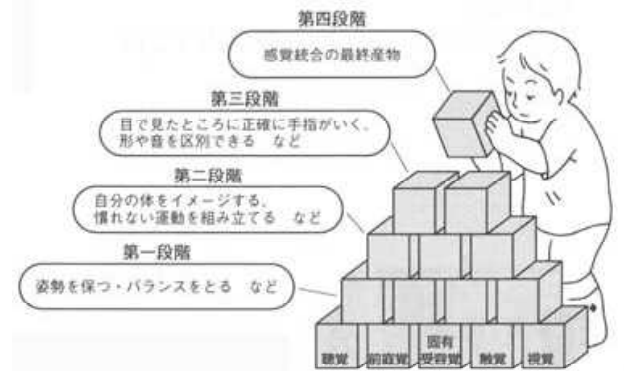
2) 感覚統合の考え方による説明

感覚統合の考え方に基づく説明はさらに説得力が増す。感覚統合の考え方では「固有覚（固有受容覚）」や「前庭覚（平衡感覚）」に注目する。固有覚とは、体のさまざまな部位の位置や動き、関節の曲がり具合、筋肉への力の入れ方などを感知しフィードバックする機能であり、力を加減する運動をコントロールする、姿勢を保つ、バランスをとる、情緒を安定させる、ボディイメージなど

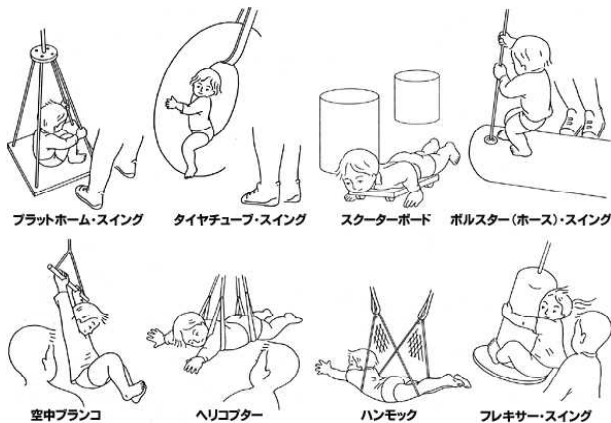
と関係する。前庭覚は自分の身体の位置や傾き、動きのスピード、回転を感じる感覚であり、覚醒レベルの調整、抗重力姿勢の維持、バランスを取る働き、眼球運動など

と関係する。五感の一つである触覚も重要な感覚で、情緒の安定、物を触覚により識別する、触れられることへの防衛などの働きを生み出す。

これらの感覚が何らかの理由で十分に機能しないと姿勢保持の困難、覚醒レベルの低下、情緒の不安定、不器用、臆病、触覚防衛、自回転（くるくる回る）など、さまざまな不可解な行動を生み出す。発達障害のお子さんによくみられる症状である。体を動かす遊びを意識的に行うと、これらの感覚入力が調整され、適応的な行動が増えていくことが多い。



感覚統合療法入門講習会資料



感覚統合をすすめる
（脳の中の電線の電気の通りをよくする）遊びの要素

- ①揺れ … ブランコ 抱っこしてゆする
- ②回転 … 抱っこで回転 芋ムシゴロゴロ
- ③加速度 … フロアカー遊び すべり台
- ④上下動 … トランポリン 高い高い
- ⑤触覚 … 抱きしめる 水遊び 粘土